Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-06-03

ローティにおける私的なアイロニー : 克服と創造の問題をめぐって

倉形, 一樹

(Citation)
愛知 : φιλοσοφια,29:80-94

(Issue Date)
2017-12-15

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010346

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010346

ローティにおける私的なアイロニー
―克服と創造の問題をめぐって―

倉形 一樹

序論

本稿は、R.ローティ（1931-2007）の『偶然性・アイロニー・連帯』（1989）における「自己創造（self-creation）」という概念について、主として言語論および自己形成の観点から取り扱うことを目標とする。ローティは上の著書において、公私を厳密に分離した生のあり方として「リベラル・アイロニスト」を提示する。要約すれば、「リベラル・アイロニスト」は、公共的なものと私的なものとを統一する理論を棄て去り、それらを共約不可能なものとして見る。すなわち、人間の連帯と自己創造の要求とを互いに峻別する者を指している。本稿では、以上のように彼によって二つに切り分けられたうちの、私的なものの創造に関する考察を取り扱うことで、主に私的なものにおける生の営為が一体どういうものになるのかということについて詳述し、またその際、彼の議論における不十分な点について指摘する（1）。

1．言語と創造性

はじめに、ローティの思想の中心を担う言語論を出発点として彼の見解を簡潔に示したい。彼は、ネオプラグマティストとしてプラグマティズムの立場をとりつつ、分析哲学と大陸哲学の間を自由に横断することで独自の思想を形成している。彼のプラグマティズムは「反表象主義」や「反本質主義」、また「反基礎づけ主義」などを伴い、伝統的な哲学に対する批判から展開されていく。そして彼の言語論でとられる立場は、主に「反表象主義」と「反本質主義」である。以下では、これら二つの立場を簡潔に明らかにし、その後、言語と創造性の連関について述べる。

ローティは D.デイヴィドソンを踏襲し、「反表象主義」を提示する。

それは、事物と正確に対応しているものとしての言語、または事物を媒介しているものとしての言語といった考えを拒否することである。彼によれば、伝統的哲学は言語や人間に内在する何らかのものを事物とつなぎ合わせることによって、非人間的な実在の本性へと到達しようとする試みである。そのような実在への到達を断念することで、言語や言葉、ないしは語彙は、人間が活動する上でのたんに役立つ、有用な道具として見なされる。そのような「道具使用というのは、ハンマーであれ、銃であれ、何らかの信念や言明であれ、生物と環境との相互作用の一部である」。すなわち、プラグマティストは「言葉の利用を、環境の内在的本性を表象しようとする営みではなく、環境に対処するための道具使用とみなす」のである（PSH,xxiii）。

他方で、ローティが「本質主義」と呼ぶ陣営に属する哲学者は、例えば X がどのようなものかについて「X は本当は・・・」と問うことで、内奥にある X の本性を、唯一であり、かつ不動であるような真なる記述を発見しようと試みる。しかしながらプラグマティストの立場からすれば、私たちは X に関する記述を仕えるべき目的のために有用であるから使用しているのであり、あるいは、そうした目的を作り出すために記述を行なうのであり、X に関する記述がある目的にとって有用であるということ以外の、何かしら特権的な理由によって権威を持つような記述というのは存在しないのである[2]。

こうした実在に対応するものとしての言語という考え方や本質という考え方を徹底的に退けることで、「メタファー」すなわち「言語的革新性（linguistic novelty）」（CIS,28）は、実在により一致した記述の発見として見なされるのではなく、私たちの語り方を変えるものとして見なされるようになる。ローティはヘーゲルが弁証法を用いたこと、またデイヴィドソンが対応説を放棄したことを指し、次のように記述している。

> 哲学の方法として論証法の代わりに弁証法を使うこと、あるいは真理の対応説を棄て去ることは、「哲学」や「真理」と呼ばれている、以前から存在している実在の本性に関する発見ではない。それは私たちの語り方を変えるこ

とであり、そのことによって私たちがやりたいと望むこと、私たちが自分の有り様だと考えていることを、変えることなのである。（CIS,20）

ローティによれば、物と人間との間を媒介する言語、ないし物と正確に対応する言語という像に関する新たな記述を生み出した者として彼らを考えるべきではない。私たちは彼らを、私たちの語り方を変え、さらには私たちの有り様を変えることを可能とするような革新的な記述をした者として、つまりメタファーを編み出した者として考えるべきなのである。

これまでの議論を別の言い方で要約するなら、次のようになるだろう。すなわち、近代以降において一部の哲学者たちが、「真理の探求」を精神や魂といったジャーゴンを用いることから「言語」それ自体を探求することへとシフトさせた時、依然として精神や魂のジャーゴンが伴っていた神聖さの残滓を「言語」は引き継いでいた。ローティはそうした見方を退けるべきだと考え、以上の二つの「反本質主義」「反本質主義」という立場をとったのである。そして、道具的な言語観は、同時に、言語を「旧いもの」と「新しいもの」という区別として見なすことを可能とする。実際に彼は『偶然性・アイロニー・連帯』において、「馴染みのある」「字義どおりの」に対する「メタファー」「新しい言葉」という言葉を積極的に用いている。このように言語の見方が転換されることによって、言語は「旧いものか新しいものか」という基準に置き換えられ、そこで彼は、その「新しいもの」すなわち「メタファー」について議論を展開する。

ローティによれば、私たちに新たな信念を加えるものは知覚、推論、メタファーの三つのものがある。知覚と推論はいずれも重要な役割を果たすが、しかしそれらは私たちの言語を変えるものではない。一方でメタファーは、私たちの使うことのできる文の総体を変更する。彼にとって人間の能力において貴重なものは、まさにメタファーという私たちの新たな語り方を生みだせる能力にある。

> メタファーを信念の第三の源泉と見、それゆえわれわれの信念と願望の網目を織り直す第三の動機と見ることは、言語や、論理空間や、可能性の領野を、変更可能なものとして見ることである。〔…〕メタファーは、論理空間のある部分を経験的に満たすとか、その空間の構造を論理・哲学的に解明するとかいった類いのものではない、言わば、論理空間の外からの声である。それは、自分の言語や生活をどのように体系化するかについての提案ではなく、自分の言語や生活を変えよという要請である。（PPv2,12）

新たなメタファーによって私たちが「新しい考え方」を提供するとき、ローティの言によれば、新たなメタファーを「編み込む」とき、言うなれば、それは人間を、そして「文化を時代遅れの語彙から解放すること」（PPv2,18）に役立つのである。「新たなメタファー」を獲得することは、私たちの語り方を変えること、言い換えれば「新たな習慣を獲得すること」と同義のものとなる。

２．強い詩人における不安と記述

新たなメタファーを獲得することは、私たちのあり方を変えることにより、文化や社会をより良い未来へと漸進させてゆく可能性を拡げる。他方で、ニーチェを範型とする私的なものの創造を行なうアイロニストもまた、メタファー生み出すことは自身を創造することにおいて必須となる。ニーチェやプルースト、またハイデガーを筆頭とするアイロニストは、新たなメタファーを生み出し記述することによって「自身にとって可能なかぎり最善の自己をつくる希望をいだく」（CIS,80）のである。

しかしながら、自己をつくるという欲求にはある特定の不安や恐れがつきまとう。ローティはそうした恐れを分析するために H.ブルームによる「強い詩人（strong poet）」という言葉を用いる。彼はブルームにおける強い詩人の定義を、彼自身の解釈する広義的な「詩人」へと適用する（CIS,24）。その際、「詩人」とは、「事柄を一新する人（a “poet”〔…〕one who makes things new）」（CIS,12-13）として理解される。

ローティは、F. ラーキンの詩をもとに「詩人」を分析する。ラーキン

によるその詩の内容は、彼がのちにインタビューで告白したように、「死にゆくことの恐れ」を語ったものである。ローティはブルームを援用しつつ、次のように述べる。すなわち、ラーキンが死という出来事に際して恐れをいだいたものの実際の中身は、彼にだけ特有の積荷リストが消滅すること、また何が可能で重要なのかをめぐる彼個人の意味づけが消滅することである、と（CIS,23）。ローティによれば、死という言葉は、それ自体としては空虚であり私たちに恐れを抱かせるようなものではない。死とは、自身の積荷リストが消滅することであり、それはすなわち、自身の生きた物語の一切が消えてしまうということである。さらに、それらが消失することへの「恐れ」は、作品を創造する者や新しいものの創造を行なう者にとって、「たとえ作品が保存され、認められていたとしても、そこに他と異なるものを誰も見いださないのではないか、という恐れと混じり合っている」（CIS,24）。

以上のような不安や恐れを克服するためには、自らの作品が他のそれと異なっていると認められること、すなわち自らの生における特異性が認められることが必要である。詩人は、「私」を本当にもっているのかどうかということに不安をいだく。彼らは、他者との明確な差異を見いだせなければ、死に際して慰められることは決してない。彼らは、他者からの影響を振りほどくこと、換言すれば、他者によって生み出された馴染みのある言葉や出来合いの言葉を乗り越えなければならないと感じる。

こうした強い恐れをいだく者は、自らの生に刻まれた印を自らの手によって記述しようと試みる。彼らは自らの生を克服するために、言い換えれば、「救い」を獲得するために自らの生を繰り返し再記述する。しかし彼らが完全に救われるためには、普遍主義的偉業に訴えて自らの生をそれに包括するか、あるいは自らの存在がそれでしかありえないような言葉や語彙を探し求めることで、他人に再記述されえない自らの言葉、物語を確保するしかない。

ローティは、「自分たちはどうしたらいいかについての反省の過程をきっぱりと終わらせる」ことができるものを「救いの真理（redemptive truth）」と呼ぶ。それは、物事がどうなっているかについての理論のみ

ならず、宗教と哲学が満たそうとした欲求を満たさなければならない。救いの真理を欲することは、「あらゆるもの———あらゆる物、人、出来事、考え、そして詩———を、一つの文脈、［すなわち］本来の、定められた、ともかくも唯一のものとわかるような文脈に、はめ込」もうと欲することである（PPv4,90）。

> そうした文脈を見つけることができるという希望は、ハイデガーの言う本来性の希望———自分の受けた教育や自分の置かれた環境の産物にとどまるのではなく、その人自身の人格となると言う希望———の一つの形である。（PPv4,90）

本来性の獲得とは、自らの人格や自らの生と、絶対的でかつ唯一な文脈との一致である。この意味で、ローティはこうした信念を獲得することを「救い」の一種として定義する。それは例えば、「哲学による救いは、物事を唯一あるがままに表象する信念群を獲得することにあり」、詩や文学は「できるだけ種々さまざまな人間の在りようを知らしめることによって救いを与える」のである（PPv4,91）。

３．詩的な記述と偶然性

本節では、上に記した哲学と詩との「救い」における大きな差異が、何を象徴としているのかについて述べておく。それは「救い」と「偶然性」の関係についての問題である。ローティは『偶然性・アイロニー・連帯』において、言語と自己、そして共同体のイメージを変えることを私たちに求める。

> ブルーメンベルク、ニーチェ、フロイト、そしてデイヴィドソンに共通する一連の思想が示唆するのは、もはや何ものをも崇拝しない、何ものをも擬似的な神性としない、すべてのもの—言語、良心、共同体—を時間と偶然の産物（product of time and chance）だとする地点にまで、私たちが到達するよう努力するべきだ、ということである。（CIS,22）

真理があると信じることは、あらかじめ決められた既成の形跡、筋道を人間が辿っているということを信じることに等しい。しかし実際には、創造することないし制作することは、いつでも人間の手によるものである。それは「真理」も同様である。ローティはこうした考えを別の箇所で「世俗主義的ヒューマニズム」(3)と呼ぶ。伝統的な哲学の記述は、こうした考え方とは相容れない。一方で、詩の記述はこうした考え方の延長線上を歩んでいる。いわば、哲学者は、時間と偶然を超えた何らかの秩序がどこかには存在するだろうと依然として信じているのに対し、詩人は、そうした秩序が存在するだろうということを信じない。

ところで、一節で述べてきたような言語の観点からしても、言語の偶然性を認めることは、言語や語彙、言葉を「パズルのピースをうまく組み合わせたもの」として見るのではなく、「古い道具に取って代わる新しい道具の発明」の推移として見るということである（CIS,13）。同様に、自己が偶然的であると認めることは以下のような記述にその場所を空けることになる。すなわち、「形式化され、統一され、現前し、自己完結している実体、言い換えれば、固定的および全体的に観られることが可能なものの代わりに、偶然的な諸関係のかたまり、過去と未来をめぐって前方と後方に張り巡らされた網状のもの」（CIS,41）として自己を見なすのである。

しかしながら、不安や恐れを持つ者の多くは自らの偶然性を超越したいと考える。彼らは自分の生、ないしあらゆる人の生を包括するような、確固たるものを見出すことによって不安や恐れを解消しようとする。詩人は、哲学的記述と詩的な記述との垣根を彷徨うことを余儀なくされる。たしかに、自らが偶然的な、不安定な、保証されていない、確固たる地盤をもっていないことを認めることは、簡単なことではない。

４．恐れや不安の克服と創造

「救い」という観点を元に自己創造を振り返れば、「詩人」は、自己克服のために記述を行なっている。つまり救いの真理を求めることは、換

言すれば、自己克服の欲求の表れである。彼らにとって、詩人としてうまくいかないことは、人間としてうまくいかないということと同義である。彼らは自らに特有のものを模索し創造することによって恐れや不安を克服しようと試みる。ここでは、ローティに倣ってニーチェを範例として考察することで自己克服の内実を明らかにする。彼によれば、ブルームとニーチェによって意味づけられる自己克服は、さらにフロイトを援用することで容易に遂行できるようになると述べる。ブルームによる「強い詩人」については前述したため、ニーチェにおける自己克服について簡潔に述べたい。

ローティは、ニーチェの自己克服の過程について次のように考察する。

> ニーチェは自己認識を自己創造とみなしたのである。自分自身を知る、自らの偶然性を直視する、自らの原因の根拠をしっかりと辿るという過程は、新しい言語を発明する———つまり新しいメタファーを考えだす———という過程と同じである。（CIS,27）

ニーチェにとって、自分以外のものによる記述を受け入れることは自らの原因の根拠をしっかりと辿ることにはならない。すでに述べたが、詩人は自分が特異な存在でないことに強い恐れや不安をいだく。ニーチェもまた、自分ではない誰かによる継承された仕方での記述ではなく、自らの認識を自らが新たに創造すること、言い換えれば、自らの手によって新しい物語を語ることで、不安や恐れを克服しようと試みたのである。

ここで再び前節の哲学と詩の関係に立ち戻れば、それらはニーチェにおいて、真理への意志と自己克服への意志との違いとして表れている。

> ニーチェは、乗り越えてゆくべき重要な境界線とは、時間を非時間的な真理から分かつものではなく、むしろ旧きものと新しきものを分かつものだと考える。人間の生は、継承された仕方でその存在の偶然性を記述することから脱却し、新たな記述を見つけるときに誇らしいものとなる、とニーチェは考える。これが真理への意志と自己克服（self-overcoming）への意志との違い

である。それは、救済とは自己よりも巨大で永続的なものにつながることだという考えと、ニーチェが描いた救済との、つまり「すべての「あった」を「私はそう欲した」に再創造すること」との、差異なのだ。（CIS,29）

「真理への意志」は自己よりも巨大で永続的なものにつながることであり、「自己克服への意志」は「私はそう欲した」として自らの物語を再記述することである。

この節では最後に次のことを指摘しておきたい。すなわち、ローティにおいて「自己創造」の概念は、「自己克服」の概念と明確に区別されていないということである。換言すれば、彼の提示する私的なものの創造において、「自己創造」と「自己克服」の間の言葉上の区別はない。たしかに、詩人はより優れた自己記述———彼らにとっては、他の誰もが創造したこともないような作品を生み出すような記述———を行うことで、最高度に完成された存在になることができ、このとき、確かに詩人は、一時的には恐れや不安を克服することができるかもしれない。だが実際のところ、その自己克服の過程には、すなわち自己記述の過程には、終わりがない。いまだ終わっていない人生をどのように記述しようと、またどのような語彙を用いようと、私たちは、自らの生が完全に報われるような、一片の翳りもないような究極的な形での「救い」となるような文脈を発見することも、また、創造することもできない。

したがって、彼らがどれほど記述を行なったとしても、またどのような記述を成し遂げようとも、当の問題は、完全には解消されない。すなわち、死に際して慰められるような何かを見つけるという彼らにとって極めて重要な問題は、完全に消え去ることはなく、どれほど自己を生み出すことに成功しても、生み出された自己もまた、克服すべき問題へと直面せざるをえない。記述には再記述のみが有効であり、再記述にはさらなる再記述が有効となるだけである。それは、生きているかぎり挑戦可能な、ある一つの自己創造、自己克服の過程である。それゆえ、創造することは、克服することを言い換えたものにすぎない。

５．脱–神聖化を伴った自己創造

以上で述べてきたことは、ニーチェや詩人は、自己を創造していくことで、あるいは刷新していくことで自己を克服するということであった。自己を克服する活動は、自己を創造する活動である。ローティは、この活動がより容易なものになることを助けるためにフロイトを以下のように読むことを提案する。

ここでのフロイトの重要性は、３.において簡単に触れたところであるが、自己の偶然性をどのように捉えるかという点である。ローティによれば、フロイトは「私たちの成長過程の偶然」すなわち「偶然のかたまりとしての自己」を明らかにしてくれる。その上、フロイトがなしたようなやり方で、ブルームは詩人の再記述をめぐる偶然性を示唆する（CIS,31-41）。つまりローティは、フロイトを用いて人間存在の偶然性を強調し、さらにブルームを用いて脱–神聖化された自己記述による自己創造の可能性を示唆している。

ローティは、フロイトを次のように分析する。彼は、カントかニーチェかという二つの形式から人間の道徳意識を選択するという従来なされてきた方法を退ける。人間の道徳意識に普遍的で固定的な記述をあてることはできない。両者のいずれも、自らの手元にある素材を用いて最善を尽くしているのであるが、そのような試みにおいても人間の偶然性は超越できない。彼によれば、私たちの道徳意識の真なる領域、そしてそれを記述できるようなものというのも存在しない[(4)]。ローティは、フロイトの次の言葉を引用している。

> もし人が、偶然というものを私たちの運命を左右するに相応しいものでないとするならば、それはたんに、レオナルド［ダ・ヴィンチ］自身が「太陽は動かない」と書いてその克服を準備したところの、あの敬虔な世界観へ逆戻りすることを意味する。……私たちはとかく次のような事実を忘れがちなのである。すなわち私たちの人生ではもともと一切が偶然なのだということを。精子と卵子との出会いによる私たちの発生からしてすでに、そういう偶然なのである。（CIS,31）

このようなフロイトの偶然に関する記述が、ローティにおける偶然に関する記述と通じているのは明らかである。フロイトは、私たちの偶然的に織りなされる道徳意識についての精密な分析によって、私たちの心についての脱−神聖化された記述を生み出したのである。

次いで、ブルームは、フロイトが道徳意識を脱−神聖化したように、詩人という存在を脱−神聖化する。ブルームの見方によれば、ニーチェは超人的な生き方として自らを神聖化しようとしたが、それは解体されるべきものである。ブルームによれば、詩人および彼らが生み出す作品は、実際には、「読者の好意の中にある」（CIS,41）にすぎない。この考え方は非常に重要である。というのも、ニーチェが「超人」を提示するとき、または自己創造を行なう者として詩人を神聖化するとき、彼は純粋な活動であるような究極に完成された存在になろうと試みているが、いずれも、他者の好意に依存することなしに自己創造を達成しようとするのは不可能なのである。２.で明らかにしたように、そもそも強い詩人による不安や恐れは、他者と自分がどのように異なっているのかということをめぐる問題に対してもそれを抱くのである。どれほど優れた詩人であれ、先人が使用した馴染みのある言葉を必要とすること、言い換えれば、「ある時点において人は、ほかの生を生き、ほかの詩を書くであろう人びとの好意に信頼をおかなければならない」（CIS,42）のである。他者からの影響を完全に振り切って自らを生み出すことはできない。そしてこのような考え方を受け入れるならば、私たちは十分に、自分自身、また自分自身に関する物語を脱−神聖化をすることができるだろう。

> ナボコフは彼の最高傑作『青白い炎』を、「人間の生は未完成の深遠な詩の注釈である」というフレーズを中心にしてつくりあげた。このフレーズは、人間の生は全て洗練された特異なファンタジーを仕上げることだ、というフロイトの主張を要約するものであり、そして、死の介入以前にこのような仕事の完成はないということを気づかせるものである。このような仕事に完成がありえないのは、完成するものなど存在せず、ただ再び織りなされるべき

網状のもの、つまり時とともに日々拡張する網状のものだけが存在するからである。（CIS,42-43）

結論

『偶然性・アイロニー・連帯』の中でローティが明示していることは、本稿で考察してきたところの私的なものの営為の可能性と、本稿では触れなかった公共的なものの営為、すなわち連帯の可能性の二つの事柄についてである。しかしまた、彼が暗に示してきた事柄の一つには、強烈なアイロニー精神を持つ者による自己創造の不可能性がある。それだけで純粋であるような完成された生をつかみ取ろうとすること、他者による影響から完全に逃れ自律的になろうとすること、将来的に再記述されえない自己記述を生み出すことによって自己創造を達成しようとすることは全て不可能な試みである。こうしたローティの手がける解体劇の中では「偶然性」が重要なタームである。「偶然性」を受け入れることで、私たち自身の自己創造を、私たち自身の目的にとってより良いものとして達成することができるということを、ローティは繰り返し主張していたのである。

最後に、ローティの自己創造論における不十分な点を指摘したい。彼の主張では、アイロニスト（本稿で扱った言い方からすれば「詩人」）において自己創造で希求される「救い」は、作品を創造すること、すなわち自己記述において見出されるとされていた。しかしながら、本稿でも註１に付したが、彼は、詩人は他者によって救われる必要があると一度は述べていたにも関わらず、『偶然性・アイロニー・連帯』では彼の描くアイロニスト像によって、その可能性がそもそも入る余地のないものとなっている。

アイロニスト〔…〕は、他の人びとに語りかけることを必死に求めており、その必要は、人びとが性的な交わりにいだく必要と同じくらい切実なものだということである。アイロニストが他者に語りかけることを必要とするのは、他者と会話を交えることによってのみ、自らの疑いを制御し、自らのまとま

りを維持し、自らの信念や欲求の網の目を整合したものに保ち、それにもとづいて行為することが可能となるからである。〔…〕アイロニストにとっては、理由はどうあれ、社会化は完全なものではないからである。（CIS,186）

生粋のアイロニストが他者との会話を希求するとき、その相手が少なくとも「アイロニーに引き渡されている人」であるという点で彼の分析は正しい。しかし彼がアイロニストの社会化は完全なものではないと述べるところと同じような理由によって、アイロニストのアイロニーは完全なものではないのである。彼がここで想定しているような生粋のアイロニストというものは存在しない。それゆえ、彼は次のように付け加えるべきであっただろう。すなわち、アイロニストはつねに、他者との関係性の中へと入るときには他者によって織り成される再記述に自らを置かなければならないが、しかし同時に、そこには自己記述がもたらす「救い」に匹敵するものがあることを彼らは理解しなければならない、と。

名前ってなに？バラと呼んでいる花を

別の名前にしてみても美しい香りはそのまま（WS,65）

上の引用は、シェイクスピアの劇作『ロミオとジュリエット』の台詞の一つである。ジュリエットがロミオに向けたこの言葉は、ジュリエットにとってロミオという人物が、たとえロミオがロミオという名を捨てても、ロミオがロミオという人物であることは変わりえないということを表したメタファーである。筆者はシェイクスピアの描いたこの一節を、他者との関係性のうちにある「救い」の記述の一例として挙げたい。私たちは他者を介して救われるということを十分に認めるであろうし、それはおそらく、自分以外の存在のうちにある種々様々な大きな物語の中に、自分自身の生の断片を見出すことなのである[5]。

註

(1) 私的なものと公共的なものというローティにおける分離そのものの妥当性については様々な議論が呼び起こされている。筆者は『偶然性・アイロニー・連帯』を次のように位置づけることを提案したい。『偶然性・アイロニー・連帯』のちょうど１０年前に発表された論文'Is There a Problem about Fiction Discourse?'に注目すれば、『偶然性・アイロニー・連帯』は、私的なものへの強いこだわりをいだく人々にも向けられたものであり、彼らの抱く私的なものの崇高な創造という欲求を消散させ、かつ、その欲求を「公共的なもの」へと侵入するという形でなく、それらを折衷させるための教養書だとみなすことができる。というのも、ローティはその論文で、人間の性質を了解する人を詩人だとみなすことは危険であると述べているが、詩人を神聖化するというこのような態度にある危険を、ローティが10年後に記述した「偶然性」の考え方を適用することによって解消しようとしたと考えるのは不自然なことではないからである。また、そこで彼は「詩人は彼の友人たちから救出される必要がある」と述べている。彼の描いた「私的なアイロニー」を精査するには、この主張も大いに考慮されるべき点である。

(2) ローティによる本質主義者に対する批判が詳細に述べられている箇所については、Richard Rorty, 'A World without Substance or Essences (1994)' in *Philosophy and Social Hope*, Penguin Books, 2000 を参照されたい。

(3) 「世俗主義的ヒューマニズム」という言葉は、リチャード・ローティ『リベラル・ユートピアという希望』(2002) , p. ix-x における「日本の読者に」の章で書かれたものの中に出てきている。また、ローティが実存主義者の立場に関して評価を高くする点は、この見解の一部に彼らが同意するだろうからである。しかしローティが「本質」を退けると同時に、彼らとは袂を分かつことになる。それは、彼が W.セラーズを引き合いに人間を「受肉した語彙」として見なすとき、サルトルではなく後期ハイデガーの苦悩に関心を寄せていたことの理由である。

(4) ローティがフロイトの有用性を強調するのは、それは当時において彼による記述が革新的なメタファーであったことや、彼の記述する人間存在の道

徳意識は私的な語彙をつくりあげるのを阻害しないこと、そして彼が「人間の生は詩である」と述べた真意を見抜いたためである。

(5) 筆者の最後の提案を別の言い方にするならば次のようになる。つまり、ニーチェもプルーストも自らの自律のために他者からの記述を振りほどくが、もし彼らが他者による美しい記述を置く場所を自らの内に空けていたならば、違う仕方でも救われたかもしれなかっただろうということである。

参考文献

〔CIS〕 Rorty, Richard. *Contingency, Irony, and Solidarity*, Cambridge University Press, 1989（リチャード・ローティ『偶然性・アイロニー・連帯』齋藤純一・山岡龍一・大川正彦、岩波書店、2000 年）

〔PPv2〕———. *Essay On Heiddger And Others*: *Philosophical Papers, Volume 2* ,Cambridge University Press, 1991

〔PSH〕———. *Philosophy and Social Hope*, Penguin Books, 2000（リチャード・ローティ『リベラル・ユートピアという希望』須藤訓任・渡辺啓真、岩波書店、2002 年）

〔PPv4〕———. *Philosophy as Cultural Politics*: *Philosophical Paper, Volume 4* ,Cambridge University Press,2007（リチャード・ローティ『文化政治としての哲学』冨田恭彦・戸田剛文、岩波書店、2011 年）

〔WS〕ウィリアム・シェイクスピア『ロミオとジュリエット』小田島雄志、白水社、1983 年

所属（神戸大学人文学研究科博士前期課程）